



大岡昇平全集 2

一九九四年十月二十日 初版第一刷発行

著 者 大岡昇平

発行者 森本政彦

発行所 株式会社筑摩書房

東京都台東区蔵前二一五―三 郵便番号一―一
振替 東京〇〇一六〇―八―四一三三

印刷 株式会社精興社

製本 株式会社積信堂

ISBN4-480-70262-8 C0393

©ŌKA SHŌHEI 1994 Printed in Japan



乱丁・落丁本の場合は、御面倒ですが左記に御送付ください。ご注文・お問い合わせも左記へお願い致します。
大宮市榎引町二一六〇四 筑摩書房サービスセンター
郵便番号 三三二 電話 〇四八―六五一―〇〇五三

大岡昇平全集 2 目次

俘虜記

捉まるまで 4

サンホセ野戦病院 41

タクロバンの雨 55

パロの陽 83

生きている俘虜 105

戦友 143

季節 161

労働 189

八月十日 242

新しき俘虜と古き俘虜 260

演芸大会 280

帰還 304

附 西矢隊始末記 327

靴の話

食慾について

俘虜逃亡

西矢隊奮戦

ミンドロ島誌

比島に着いた補充兵

サンホセの聖母

海上にて

出征

暗号手

襲撃

敗走紀行

女中の子

歩哨の眼について

529 513 489 477 461 437 423 407 393 387 373 363 355

山中露營

ユー・アー・ヘヴィ

忘れ得ぬ人々

齋藤君の思い出

〔参考資料〕

真藤君の思い出

解説 『俘虜記』のエチカ 柄谷行人

解題

641 629

603

579 563 551 537

大岡昇平全集

2

小説 I

装 幀 司 修
題 字 埴 谷 雄 高

俘虜記

或る監禁状態を別の監禁状態で表わしてもいいはずだ

デフォルト

捉まるまで

わがころのよくてころさぬにはあらず

歎異抄

私は昭和二十年一月二十五日ミンドロ島南方山中において米軍の俘虜となった。

ミンドロ島はルソン島西南に位置するわが四国の半分ほどの大きさの島である。軍事施設として見るべきものなく、これを守るわが兵力は歩兵二ヶ中隊、海岸線に沿った六つの要地に名ばかりの警備駐屯を行うのみである。私の属する中隊は昭和十九年八月以来、島の南部及西部の警備を担当した。中隊本部は私を含む一ヶ小隊と共に島の西南端サンホセにあり、他の二つの小隊はそれぞれ東南ブララカオ及び西北バルアンにあった。サンホセ、バルアン間、つまりこの島の全長を蔽う約五十里の西海岸の全部が開け放たれ、ゲリラが自由に米潜水艦の補給を受けていた。しかし彼等は攻撃しては来なかった。

昭和十九年十二月十五日米軍は艦船約六十隻をもってサンホセに上陸した。我々は直ちに山に入り、南部丘陵地帯を横切って、三日の後ブララカオ背後の高地で同地駐屯の小隊と連絡した。米軍はまだこの地の上っていないが、彼等はサンホセの砲声を聞いて、いち早く糧食、無線機と共にここに退避していたのである。糧食はなお豊富であり、まもなく我々と合流した附近の水上機基地の海軍部隊、遭難船舶工兵、非戦闘員を合せ総員約二百名、なお三ヶ月以上を支え得る筈であった。明けて一月二十四日米軍の襲撃を受けて四散する迄、我々は約

四十日ここに露営した。

米機は終日頭上にあつたが、米軍は直ちに追求しては来なかつた。「奴等は怠け者だからこんなとこまでやって来やしないさ。そっちが来なけりゃこっちだって行かないや。そのうち戦争も終るだろう」と我々の当分の宿舎となるべき小屋掛け作業を指揮しながら或る下士官がいったが、これは我々の希望のかなり端的な表現であつた。即ち米軍がこの島をルソン島攻撃の中継基地として選んだことが明白である以上、我々がこの山中にじつとして居れば、戦は我々の上を通過して、ここは最後まで所謂「忘れられた戦線」として残る可能性があつたからである。我々の様な孤立無援の小部隊の抱き得る唯一の希望である。

しかし不幸にして我々はやはり「行かない」わけにはいかなかつた。我々はやがてルソン島バタンガス所在の大隊本部から敵状偵察の命を受け、度々十数名より成る斥候が組織され、十日或いは一週間サンホセ附近の山中に潜伏して歸つた。或る時彼等は米哨兵に発見され射撃された。

まもなく一ヶ小隊はサンホセを見晴らす高地に移動して分哨となり、毎日彼等が望遠鏡で見たる状況を大隊本部に打電した。彼等は屢々数十隻より成る船団がサンホセ沖を通過北上するのを見、大型爆撃機が多数新設飛行場から離陸するのを見た。かつて我々がボートを操って魚を釣つた湾内には、米機外艇が引掻いた様に白い水脈を引いて縦横に疾駆していた。

一月に入り大隊本部は百五十名から成る斬込隊の派遣を告げて来た。しかし彼等の到着予定日には米軍が中部東海岸一帯に上陸して居り、彼等を乗せた舟艇は以来行方不明であつた。もつともこの斬込隊は我々の間ではあまり歓迎すべき客とは考えられていなかった。何となれば彼等の到着はとりも直さず、我々の中からも若干の決死隊を出して嚮導とせねばならぬことを意味したからである。六十隻をもって上陸した米軍に対する百五十名の斬込隊の成果について、我々は何の幻想も持っていなかつた。

しかし我々はその後も命令により幾度かブラカオに出張し、或いは到着しているかも知れぬ斬込隊を迎えに行つた。我々は無人の民家を荒し、たまたま家財を取りに来た不運な住民を拉致して歸つた。こうして我々は不

本意ながらだんだん掃蕩される原因を作ってしまったのである。

こうした絶望的状况にあっても、我々兵士は比較的呑気であった。我々は尽くその年初めて召集され、三ヶ月の教育の後直ちにここへ送られた補充兵であり、経験の欠如から事態の重大さがピンと来なかったからである。しかしいくら正確に事態を認識したからといって、いつ来るかわからぬ圧倒的に優勢な相手を毎日気に病んでいられるものでもない以上、こうした無智は我々にとってむしろ一種天与の恩恵だったということも出来ようか。我々は大部分私の様な三十を越した中年の兵士であり、目前の事態から強いて早急な結論を求めようとはしなかった。

それにこの山中の生活は最初のうちはそんなに悪いものではなかった。気候は既に乾季に入って雨も少なく、暑いのは日中、それも日向だけであるから、着のみのままの露営生活には丁度手頃な陽気である。糧食も差当って不自由なく、分隊毎に疎開分宿したから軍紀もおのずから緩んで、兵士を片苦しい軍隊の日常の作法から解放した。我々はキャンプにでも来た様な気持で谷川の水で飯を炊き、マニヤンと呼ばれる付近の山人（これは海岸地方に住む一般比島人より色の黒い異人種で、戦争に無関心である）と馴れて、赤布、アルミ貨等を与えて、芋、バナナ、煙草等を獲た。我々は時々は麓に下り、飼主を失って彷徨する牛を射ってその肉を食べた。

しかし災厄は意外な方からやって来た。マラリヤである。

ミンドロは比島群島中最も悪性のマラリヤの発生する島だそうである。しかし予防薬をとっていたため、サンホセに在る間は患者は二、三名を越えなかったが、山へ入る時衛生兵がキニーネを忘棄したため、やがて急速に蔓延し、一月二十四日米軍に襲撃された時、立って戦い得る者三十人を出なかった。最後の半月の間には大体一日三人ずつ死んで行った。

病人は静かに死んだ。彼等の急激な意気沮喪は著しく、その呑気な日常と異様な対照を示していた。

中隊長は毎朝各分隊の小屋を見舞った。彼は小屋に充滿している病人を眺め、黙って戸口に立ちつくした。

私の分隊長は米軍上陸直後まだ退路の開いていた間に、遮二無二北上してルソン島に渡らなかつたことにつき、

中隊長の決意を非難する口吻を洩らした。彼によれば、こんな山の中にいつまでもまごまごしているから、大隊本部から面倒な偵察の命令を受け、結局こうして病人が増えて動きがとれなくなったのである。

下士官のエゴイズムである。しかしこの判断にはルソン島を不落の安全地帯と見做す近視眼的前提が含まれていた。かつてノモンハンの戦闘を見た中隊長が、比島派遣軍の運命についてかかる楽観的予測を抱懐し得た筈はない。

彼は幹部候補生上りの若い中尉で、二十七歳であったが、無口で陰気で、三十歳より下には見えなかった。彼がノモンハンで何をなし何を見たか、彼は一度も語らなかつたが、その眼その顔には現れていた。私は彼の体とその僚友の死臭を嗅ぐ様にさえ思った。

「警備隊は警備地区をもってその墓場と心得ねばならぬ」と彼はいつもいつていたが、私は彼が通り一遍の訓示を行っていたとは思わない。

彼は我々の現在地を特に米軍から秘匿しようとはしなかつた。サンホセから道案内した住民には、慣習に反して食糧を与え放ち帰らしめた。彼の言動には常に一種の諦めがあり、彼の動作はいわば過度に緩慢であつて、時々歯の間から押し出す様に弱く笑つた。犠牲者の笑いである。

彼は幾分進んで死を求めた様である。サンホセ駐屯中行つた討伐戦において、彼は常に先頭に立って戦い、決して自分を遮蔽しなかつた。彼は自分では戦争の要請を至上命令として自らに課することを許しながら、それを部下に課することについては自己の責任を感じずにはいられない、あの心の優しい指揮者の一人であつた。彼等は一般にただ自己の死によつてしか、その部下に対する要求を正当化する手段を持っていない。

山中で最後に米軍の襲撃を受けた時、彼は火点観測のため単身前進し、迫撃砲の直撃弾を受けて真先に戦死した。恐らく本望だつたらう。

一種の共感から私はこの若い将校を秘かに愛していた。私もまた私なりに彼とはかなり違った意味においてであつたけれど、自己の確実な死を見詰めて生きていたからである。

私は既に日本の勝利を信じていなかった。私は祖国をこんな絶望的な戦に引ずりこんだ軍部を憎んでいたが、私がこれまで彼等を阻止すべく何事も賭さなかつた以上、今更彼等によって与えられた運命に抗議する権利はないと思われた。一介の無力な市民と、一国の暴力を行使する組織とを対等に置くこゝろした考え方に私は滑稽を感じたが、今無意味な死に駆り出されて行く自己の愚劣を嗤わないうためにも、そう考へる必要があつたのである。

しかし夜、関門海峡に投錨した輸送船の甲板から、下の方を動いて行く玩具の様な連絡船の赤や青の灯を見て、奴隸の様に死に向つて積み出されて行く自分の惨めさが肚にこたえた。

出征する日まで私は「祖国と運命を共にするまで」という観念に安住し、時局便乗の虚言者も空しく談ずる敗戦主義者も一茶^かげに嗤っていたが、いざ輸送船に乗ってしまうと、単なる「死」がどっかりと私の前に腰を下して動かないのに閉口した。

私の三十五年の生涯は満足すべきものではなく、別れを告げる人はあり、別れは実際辛かつたが、それは現に私が輸送船上にいるという事実によつて、確実に過ぎ去つた。未来には死があるばかりであるが、我々がそれについて表象し得るものは完全なる虚無であり、そこに移るのも、今私が否応なく輸送船に乗せられたと同じ推移をもつてすることが出来るならば、私に何の思い患うことがあろう。私は繰り返しよう自分にいい聞かせた。しかし死の観念は絶えず戻つて、生活のあらゆる瞬間に私を襲つた。私は遂にいかにも死とは何者でもない、ただ確実な死を控えて今私が生きている、それが問題なのだということを了解した。

死の観念はしかし快い観念である。比島の原色の朝焼夕焼、椰子と火焰樹は私を狂喜させた。到る処死の影を見ながら、私はこの植物が動物を圧倒している熱帯の風物を眼で貪つた。私は死の前にこゝろした生の氾濫を見せてくれた運命に感謝した。山へ入つてからの自然には椰子はなく、低地の繁茂に高原的な秩序が取つて替つたが、それも私にはますます美しく思われた。こうして自然の懷で絶えず増大して行く快感は、私の最後の時が近づいた確実なしるしであると思われた。

しかしいよいよ退路が遮断され、周囲で僚友が次々に死んで行くのを見るにつれ、不思議な変化が私の中で起

った。私は突然私の生還の可能性を信じた。九分九厘確実な死は突然推しのけられ、一脈の空想的な可能性を描いて、それを追求する気になった。少なくともそのために万全をつくさないのは無意味と思われた。

明らかにこれは周囲に濃くなって来た死の影に対する私の肉体の反作用であった。こうした異常な状態にあって、肉体が我々をして行わしめるものは頗る現実的であるが、その考えさすものは常に荒唐無稽である。

私には一人の仲間があった。それはSという或る漁業会社の重役の息子で、私と同年の、妻子のある男だったが、彼は銃後の資本家のエゴイズムに愛想をつかし（と彼はいつていた）その手先たらんよりは前線に出て一兵卒として戦うことを夢みた。彼は内地で教育中前線出動の可能性をわざと軍に影響を持つ父親に知らさず、自ら内地に残る手段を絶ち切っていた。彼の夢は前線の状況を見て破れた。彼はわが軍が愚劣に戦っていると判断し、「こんな戦場で死んじゃつまらない」と思ったという。

この言葉は私にとって一種の天啓であった。この死を無理に自ら選んだ死とする倨傲が、一種の自己欺瞞にすぎないことに私は突然思い当った。こんな辺鄙な山中でなすところなく愚劣な作戦の犠牲になって死ぬのは、単に「つまらない」、ただそれだけなのである。

我々は二人で比島脱出の計画を立てた。その計画とはこうである——いづれ我々が米軍によって現在地を逐われるのは確実として、何とか敵中を潜って西海岸に出る。そして住民の帆船を分捕り、季節風を利用して島伝いにボルネオに遁れる（この際私が海水浴場で覚えた帆走術が役立つ筈であった）。私はボルネオも安全とはいえないから、いっそ南支那海を突切って仏印に渡ってはどうかと提案したが、Sはそれは食糧と航海技術の関係で不可能だから、次善を選ぶほかはあるまいといった。

帆船が得られなかった場合、我々は再び山に籠り、草の根でも食べて休戦を待つのである。我々は子供の時読んだ「ロビンソン・クルソー」の細目を語り合ひ、山人から竹から火を起す方法を学んでおいた。

この計画はいかにも空想的なものであるが、我々はその実現の可能性を少しも疑わなかった。

我々は繰り返しこの計画を検討し、日に三人誰かが死んで行く中で、墓掘人足の様には快活だった。（我々は実

際墓穴を掘った）我々はまた当時我々の最も身近な敵、マラリヤに罹った場合を考慮し、現在残った唯一の対抗法、つまり予め体力を貯えることに全力をあげた。我々は病人の残した粥を食べ、土に落ちた飯粒も拾って食べた。

しかし我々はこうしてあらゆる場合に備えて周到に計画していたにも拘らず、我々がマラリヤで発熱している丁度その時、米軍がやって来る可能性については想到していなかった。

二人共申し合わせた様に一月十六日に発熱した。私は四十度の熱が続き、二日目には足が立たなくなり、三日目に舌がもつれた。Sの症状は私ほど重くはなかったが、やはり毎日三十九度以上の熱が出た。

最初の試練が来たのである。私は心に「武器を取れ」を叫んだ。私の体は強健ではなかったが、病に対しては比較的抵抗力があるのを知っていた。私は細心に自分の症状を観察し、療法を自分で工夫した。熱のためすぐ下痢が始まったのを見て、消化器に無益な負担をかけないために（これがその時の私の考えであった）一切食べないことにした。半月位食わずにいても、体力を維持するだけのエネルギーを貯えてあると私は自負していた。

衛生兵は山へ入ってから奇妙なマラリヤ療法を發明していた。それはマラリヤ患者は水を呑んではいけないというのである。私はそれまでの盲従の習慣を一擲し、断乎として反対した。あらゆる論拠をあげて、その禁止の無意味なることを証明して見せた。分隊長は怒って兵士が私のために水を汲むことを禁じた。私は他の分隊の兵士が通るのを待ってひそかに頼み、或いは自分で十間ばかり離れた泉まで匍って行って水筒に水を入れた。

私は死がマラリヤ患者を急激に襲うのに気がついていて、私は絶えず自分の体の状態を監視し、まだ死につかないのを確かめた。私はまた病人が死ぬ前に糞便を失禁するのを見て、苦痛が激しくなると、わざと戸口まで匍い出して小便をして見た。

この間に一人同じ分隊の兵士が死んだ。屍体は私の胸を越えて運ばれた。分隊の全員が病人であったから、比較的軽い病人が土葬を手伝わねばならなかった。長らく発熱していて少しよくなったと思われた一人の兵士が、死人の装具を一丁ばかり上の中隊本部まで返納にやらされた。帰って小屋に入る時、私は彼の顔が異様に歪んで

いるのを認めた。翌朝彼は死んでいた。

この兵士が死んだのは一月二十二日である。私も少し熱が下り、夕方発病後初めて少量の粥を摂った。その時展望哨が米船三隻がブララカオ湾内に入るのを見たと言えられた。

分隊長は中隊本部へ行き、なかなか帰らなかった。帰っても不機嫌に横になったきり何もいわなかった。我々は通りすがりの兵士から直ちに四名の斥候が出たということを知った。

翌朝眼がさめて小屋の周囲が何事もなく明るくなっているのを、不思議な気持で眺めたのを憶えている。私は漠然とその払暁米軍が来るかと考えていたのである。その日も一日無事に暮れた。前夜出た斥候は帰らなかった。夜私は分隊長に「今日米軍が来なかったところを見ると、僕達は包囲されてるんじゃないでしょうか」といった。彼は「病人の癖に生意気いな」といった。

次の日は一月二十四日である。この払暁また一組の將校斥候が出た。七時頃一人の兵士が帰って、一行は麓で襲撃され、將校は戦死したと伝えた。

分隊長はまた中隊本部に呼ばれ、すぐ帰って、病人は非戦闘員と共にサンホセ方面高地の分哨小隊まで退避する、歩ける者は仕度しろ、といった。そして彼自身も仕度をはじめた（彼も少し前から病人と称していた）。

私も漸く歩いて便所へ行けるまで回復していたが、分哨まで十五キロの道は自信がなかった。その先またどれだけ歩かなければならないか知れたものではない。私は遂に自分がここで死ななければならぬことを納得した。分隊長以下十二名中二名が死んで十名である。そのうち私を入れて四名が残った。Sは行くつもりらしく仕度を始めた。私も外へ出て、何となく小屋の廻りを歩きながら、彼に改めて「俺は残るよ」といった。

彼も大分よくなっていた。彼は私の腋の下へ腕を入れ「大丈夫だ。俺が助けてやるから一緒に行こう」といった。私はふと歩けるところまで彼と一緒に行く気になった。私は分隊長に決心を変えたことを伝えた。彼は黙っていた。

各自押し黙って仕度をした。別れの言葉は交されなかった。